



地域の人がつながる場所を作りたい

いさぎ会館 「用務員」 浦岡 雄介さん

西舞鶴のマナイ商店街を1本入った通りに「いさぎ会館」がある。子ども向けの工作教室から、地域の「おもしろい人」による講座など、近所の人々が遊びに行きたくなるイベントが行われている。2年前に同館を立ち上げ、用務員として、住み込みで活動している浦岡雄介さんにお話を伺いました。

いさぎ会館 誕生

もともと城北中学校で美術教員として勤務していた浦岡さん。子ども達が地域で楽しく暮らすためには、地域とのつながりを持つことが大切だと日々感じていた。しかし、教員の立場ではできないことに限りがある。地域で活動するためには、まずは自分が地域に入っていかななくてはならない。そんな時、偶然見つけた真名井町内会の集会所が今の「いさぎ会館」だ。建物を借りる際、思い描いている活動を説明すると快く受け入れていただき、2015年からアート活動を始めた。

当初は、子どもと地域をつなぐ場所を目指し、子どもを意識した企画を行っていたが、その方向性は少しずつ変化しているという。

「舞鶴はつまらない」「舞鶴には何もない」という言葉は、いつも大人たちから聞こえてくる。「大人がそうであったら、子ども達は舞鶴を面白くないと思う。大人自身が舞鶴を楽しんでいる姿を見せることが大事で、まずは自分たち大人が楽しまないと」

と考えるようになった。

今年4月から始めた新たな取り組み「まいつる(近所大学)」は、市民を中心とした講師に、近所に遊びに行く感覚で学べる場所がコンセプト。「自分が気になった面白い人」や「こういうことが気になる、学びたい」と思う人に講師を依頼し、主催者であり、自分も受講者の1人として企画を楽しむ。自分が話を聞いたり教えてもらったりするところを、みんなが聞ける講座にしてしまう。田辺域にまつわる歴史のような有名なものではない、誰も知らないような地域の歴史を知りたいので、それを講座にしたい」と話す。

つながりが文化を生み出す日まで

「子どもと地域をつなぐ場所」という思いから生まれたいさぎ会館だったが、最近では「地域の人がつながる場所」になってきているように感じている。自分が主体的に人と人をつなげようとしなくても、参加者や講師など、いさぎ会館で出会った人の間に自然に交流が生まれ、人々のつながりが生まれて広がっていく。「必要以上に

手を加えていたらこのようにはならなかっただろう。しんどければ集まらなくてもいい。それぐらいの緩いつながりでいいんです。そんな人と人が出会い、つながる場所になってきている」と語り、自身でも、ふと「あの場所いいな」と感じているそうだ。

「企画を考え、計画するのはとても大変なこと。計画や展望を1人で考えるより、日々の出会いから企画が生まれ、新たな出会いが次のアイデアや企画を生み、連鎖反応が起こるように活動していきたい。そういった取り組みや企画の方が、勝手にどんどん広がっていく、結果として上手くいくもの。そして、活動の輪が広がり、いつしか自分の手を離れて1つの『文化』に成長してほしい」と語ってくれた。

ふと立ち寄ると、イベントをやっている。地域の人が集まっている。時には自分もイベントをやってみる。そんな人と人が出会い、つながる場所になってほしいというのが「いさぎ会館」に込めた思いだ。

まいつる 花図鑑



各地の道端などでよく見られる多年草。全体に毛が多く、茎は根きわから枝分かれして地を這う。葉は掌状に3〜5裂し、大きな鋸歯が3〜5個あり先は尖る。夏、葉腋から長い花柄を出し、径1cmほどの花を2個ずつつける。花の色は紅紫色〜白色で舞鶴では両方が見られる。種はクチパン状態で、熟すと5裂して種をはじき飛ばす。

名前の由来は「現証拠」で古くから下痢止めとして使われ、飲むとすぐ効果が現れることから。

【協力】瓜生勝朗

市文化財保護委員(植物分野)



ゲンノショウコ
(フクロソウ科)

見ごろ 7～10月頃

